

**立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）**  
**プロジェクト研究（自由プロジェクト研究）**  
**2006年度研究【経過・成果】報告書**

<b>研究課題</b>	アジア・太平洋地域における自然環境の資源化に関する基礎的研究		
<b>研究代表者</b>	所属・職名	氏名	
	観光学研究科・教授	白坂 蕃	印
<b>研究組織</b>	所属大学名等・職名	氏名	
	文学研究科・教授	豊田 由貴夫	
	文学研究科・教授	栗田 和明	
	観光学研究科・助教授	杜 国慶	
	東海大学海洋学部・教授	川崎 一平	
	広島大学国際協力研究科・助手	関 恒樹	
	立教大学アジア地域研究所・研究員	岩田 晋典	
	観光学研究科・院生	鈴木 涼太郎	
	観光学研究科・院生	須永 和博	
文学研究科・院生	大塚 直樹		
<b>研究期間</b>	2005 年度	～	2006 年度
<b>研究経費</b>	2005 年度	2006 年度	総計
	4,000 千円	3,600 千円	7,600 千円

**研究の概要** (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本共同研究では、構成員たちの研究蓄積があるアジア・太平洋地域に焦点を絞り、人文地理学・文化人類学・観光研究の分野から、自然環境の資源化の在り方を、フィールド調査を中心にして考察した。具体的には、資源としての自然環境の管理に関わるポリティクスの具体的な記述、「伝統的知識」とされてきた環境保護思想が西洋社会によって「再発見」される現象の民族誌的考察、観光資源としての自然環境の利用のされ方に関する詳細な記述、今後の自然資源管理研究の在り方などである。前年度に引き続き、2006年度の前半にはこれらの課題について各調査地でデータを収集した。その成果を2006年11月開催のワークショップで報告し、さらに研究成果報告書を刊行した。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 自然環境の資源化 ] [ アジア・太平洋地域 ] [ 地域研究 ]

**研究【経過・成果】の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

非欧米地域の自然環境は、植民地期から国民国家の形成、今日のグローバル化にいたる社会的・経済的再編成のなかで資源化されてきた。しかし、こうしたプロセスは地域住民の周辺化や資源利用に関する当該住民の「伝統的知識」の周辺化を生み出した。これに対して近年、先住民をはじめとする地域住民の世界観や慣習、伝統農法・漁撈法が「近代科学技術に代わるオルタナティブな知恵」として「再発見」されるという状況が生じている。

本研究はアジア・太平洋地域における自然環境の開発・資源化を、こうしたグローバル／ローカルもしくは(ネオ)コロニアルな側面、そして個々の地域の文化的な側面の双方に着目しつつ、社会的実践のレベルで分析すること、さらにこれを通じて、21世紀の地球環境問題に対する具体的方策を提示することを目的とした。

2年計画の最終年度にあたる2006年度には、昨年度から継続して、研究分担者がそれぞれ研究蓄積のあるフィールドへ赴き、今回の問題設定にしたがい、現地調査を行った。その成果を2006年11月25日に開催したワークショップ「アジア・太平洋地域における自然環境の資源化に関する基礎的研究」にて公開し、議論を深めた。このワークショップの議論のなかで、これまでの研究課題として挙げていたテーマをより精緻化することができた。具体的には、①「自然資源管理のポリティクス」、②「農業の民族誌」、③「エコツーリズム」、④「自然資源管理研究の可能性」である。

①「自然資源管理のポリティクス」では、自然資源の開発や利用をめぐる複雑なポリティクスを、さまざまなアクター間の社会的実践が生起する場から明らかにしようと試みた。須永はタイ北部のカレン社会において、1990年代以降高まりつつある環境保全運動とエコツーリズムを事例としながら、エコツーリズムの振興という状況において、カレンの人々が様々な言説を利用しながら「カレン」であることの意味を問い直し、自己成型を行いつづける過程を描き出した。

関は、フィリピン、パラワン州における海域資源の共同管理の事例に注目し、資源を利用する人々が制度を地域社会の実情に適合させて様々に解釈し、操作を加え、選択的に取り込んでいることを指摘した。さらにこの過程を行為主体(エイジェンシー)の概念を使って分析し、自然環境資源へのアクセス、領有、分配をめぐる対立・抗争を、環境をめぐる制度と行為主体の相互交渉の場としてとらえ、その行為主体の様々な実践を記述した。

②「農業の民族誌」では、グローバル化のなかで浸透する「近代的知識」との複雑な絡み合いによって「伝統的知識」が構築されるという視点にたち、科学的知識やテクノロジーに対する、ローカルな主体からの習合、反発、選択という点に着目した。

白坂は、中国雲南省の西双版纳(シーサンパンナ)の焼畑農耕のあり方と、その最近の変化について論じ、住民の生活における焼畑農耕の知識の重要性が示される一方で、近年になって生じている人口増加と、国家の農業政策の変化により、焼畑農耕が徐々に実施されなくなっていく現状を示した。白坂は伝統的知識を持つ現地住民が、外部からの変化に対してさまざまな対応を迫られることを指摘した。

(様式 2-2 に続く)

**研究【経過・成果】の概要 つづき**

(つづき)

豊田はパプアニューギニアでの調査から、作物にかかわる「伝統的知識」を調べ、「科学的知識」と「伝統的知識」の関わりの問題の具体的な事例を紹介した。そのなかで、外部から現地住民の行動を見るとそこに生態学的・農学的な合理性を見出すことができるのに対して、現地住民はその合理性を意識しておらず、別の合理性によって行動しているという奇妙な現象を提示した。豊田は、西洋の科学的知識に基づく説明と、現地の民俗的論理との対立について、単純に現地の現象また民俗的知識の体系を説明できない可能性を論じた。

栗田はタンザニア、ニャキュウサ人のバナナ栽培を調査することにより、バナナに関わる現地住民の伝統的知識体系について論じ、バナナが調理用ならびに生食用という食料としてだけでなく、偽茎がウシの飼料として使われるなど、生活の様々な面に関わっていることを指摘した。このようにニャキュウサ社会ではバナナは多面的に利用されており、現地の生活に深く関わっている一方、同地域でのウシが果たしているような、「文化複合」のような性格は持っていないことが論じられた。

③の「エコツーリズム」では、自然環境を観光資源とした典型的な事例であるエコツーリズムと、これに関わる様々なアクターの相互作用が論じられる。岩田は沖縄県島尻郡座間味村におけるダイビング観光に注目し、そこに見られる環境保全の実践、特にサンゴ礁保全活動の実践について論じた。ダイバー側に環境保全意識が高く見られるのに対して、ダイビング観光に関わるショップ側の環境保全に関する関心が低く、ダイバーとショップ側の意識のギャップが観察された。ここでは自然環境を資源化する際に、資源を利用する立場の違いがもたらす対立の事例が示される。

大塚はベトナム、メコンデルタにおけるエコツーリズムの実態を論じ、旅行社がメコンデルタという地域のイメージを積極的に利用して、エコツアーを企画し始めていることを指摘した。大塚によれば、資源化され始めたばかりのエコツーリズムでは、民芸品売場、観光客用の民芸品製作現場、工場などが作られることにより、地場の雇用が創出され、また、新たな緊張関係が生み出されているという。

鈴木はベトナムのホアビン省へのツアーが「エコツアー」として商品化される過程を描くことにより、観光地の自然環境が本来の文脈から切り離され、観光産業の手によって編集される過程を示した。そして、旅行業者の業務活動には単なる商業主義のみが見られるわけではなく、エコツアーの商品化により、自然環境が資源化されるとともに、特定の「自然」へのまなざしが構築され、「エコ」概念が新たに創造されていることを指摘した。

④「自然資源管理研究の可能性」では、杜が中国雲南省における麗江古城の観光開発に関して、自然環境が人間によって作られる社会的な環境と一体になって資源化されていく過程を示した。ここでは、自然環境の資源化に際して、社会的な環境とともに扱うべき材料が示され、自然環境の資源化を扱う新たな研究の可能性が示された。

以上のように、研究最終年度の今年度は、研究会やワークショップを開催し、共同研究の性格を強めることで、「自然環境の資源化」に関する今後の研究課題を抽出することができた。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

#### ① 雑誌論文

Shirasaka, Shigeru (2006) Shifting Cultivation in Xishuangbanna, Southwestern China: A Vanishing Mountain Culture. *Global Environmental Research*, Association of International Research Initiatives for Environmental Studies (AIRIES), Tokyo, Vol. 10, No. 1, pp.21-38.

Toyoda, Yukio, 2006 'Starch extraction of Sago Palm in the Sepik area of Papua New Guinea', *Sago Palm* vol. 14(2): 85-86.

栗田和明 (2006)「アフリカ大陸出身者の移動と国境を越えるコミュニティーアジアとのつながりを探る」『平和・コミュニティー研究』2号、pp. 60-72。

杜国慶 (2006)「観光開発に伴う世界遺産『麗江古城』の変容」『アジア遊学』第83号、pp. 145-159。

岩田晋典 (印刷中)「ダイビング観光における環境保全活動—沖縄県島尻郡座間味村の事例」『明海大学 Journal of Hospitality and Tourism』第2巻第1号所収。

大塚直樹 (2007)「ベトナム土地法にみる農地使用权とその特徴—2003年土地法の改正点をめぐって」『史苑』(立教大学史学会) vol. 67-2、pp. 77-90。

須永和博 (2006)「民族観光の社会理論—タイ北部の山地少数民族社会における観光実践」安村克己・遠藤英樹・寺岡伸悟編『観光社会文化論講義』くんぷる社、pp. 71-80。

須永和博 (2006)「タイ北部山地カレン社会におけるエコツーリズムの民族誌的研究」立教大学大学院観光学研究科博士学位請求論文、241p.

鈴木涼太郎 (2006)「旅行商品造成過程における「標準化」と「差異化」—ベトナム・ハノイ発ツアーの事例から」『日本観光研究学会全国大会学術論文集』Vol. 21、pp. 109-112。

鈴木涼太郎 (印刷中)「観光商品のつくりかた—ベトナム・ハノイ行きツアーの事例から」山下晋司編『観光文化学』新曜社。

#### ② 図書

Du, Guoqing ed. (2006) *Tourism and Urban Transformation*. Tokyo: Rikkyo University Publication.

関恒樹 2006『海域世界の民族誌—フィリピン島嶼部における移動・生業・アイデンティティ』世界思想社、364p

#### ③ シンポジウム等

ワークショップ「アジア・太平洋地域における自然環境の資源化に関する基礎的研究」2006年11月25日 (於: 立教大学12号館第1会議室)

#### ④ その他

白坂蕃編『アジア・太平洋地域における自然環境の資源化に関する基礎的研究』2005～2006年度立教SFR自由プロジェクト研究成果報告書、x+142p.

Toyoda, Yukio 'Starch extraction of Sago Palm in the Sepik area of Papua New Guinea' (第1回フィリピンサゴシンポジウム2006年7月28日フィリピン、レイテ州立大学にて発表)

関恒樹「環境をめぐる制度と社会的実践—フィリピンの海域資源管理の事例から」(第24回研究大会2007年3月20日東海大学海洋学部にて発表)